

◎ 日本の給食は完璧な充実度・IDF事務総長
国際酪農連盟(IDF)のローレンス・ライケン事務総長は、日本の学校給食牛乳について「子どもの成長のための栄養供給に重要な役割を果たしている。世界的にみても日本の給食ほど完璧なプログラムは珍しい」との認識を示した。世界子ども栄養フォーラムへの出席で来日したのにあわせ、Jミルクが主催したメデア懇談会で、酪農乳業速報など専門紙の共同インタビューに答えた。

◇
—ライケン事務総長は今回、世界の給食プログラムを巡る情勢について報告する目的で来日しました。国際的に、学校給食で提供される牛乳・乳製品の位置づけを教えてください。

「日本の文科省が主催した世界子ども栄養フォーラムに出席しました。私が所属するIDFは、学校給食の中でも特にミルクに着目しており、9月に国際的な動向を調査しました。学校給食は国連がその重要性を宣言していて、中でもミルクの重要性は増えています。学校給食の充実は、各国の子どもたちの成長を巡る課題に解決をもたらします」

—日本の学校給食をどのように評価していますか。
「戦後に確立された日本の学校給食の仕組みは、世界中でも珍しく、『食育』の考え方も注目に値します。子どもたちに食事を提供する際、その生産・加工に携わる人々への感謝を教えるのは特徴的です。全ての子どもたちに栄養バランスに優れた食事を提供している点も特筆に値します。その中でも重要な役割を果たしています。栄養面で優れ、成長に欠かせないカルシウムは、1日に必要な摂取量の半分を牛乳で賄える計算になります」



インタビューに応じる
IDFのローレンス・ライケン事務総長

「Jミルクが取り

組む『土日ミルク』は、学校給食のない休日にも牛乳摂取を呼びかける運動です。とてもユニークなキャンペーンで、われわれは高く評価しています。乳業界の革新的な取り組みを奨励するデリー・イノベーション・アワードで、マーケティング&コミュニケーション部門の最優秀賞に選出しました」

―世界の学校給食を見比べて、日本が参考にし、取り入れられる事例はありますか。

「われわれのホームページには、多様な国の事例を掲載しています。中には学校給食でミルクだけを提供しているケースもあります。こうした中で、日本の給食ほど完璧な事例は見たことがありません。お皿の上に載っている食材だけでなく、いわゆる『学び』も合わさって、プログラムを構築しています。配膳や片付けを子どもたち自らこなすのも極めて珍しいでしょう。教育上から見てもとても良い取り組みだと思います」

―日本の牛乳・乳製品の評価も教えてください。

「今朝、スーパーをのぞいて、いろいろな乳製品を少しずつ購入しました。種類が豊富です。プロバイオティクスをはじめヘルスクレーム(健康強調表示)も多彩でユニークです。驚いたのは、ホールミルク(成分無調整牛乳)のパックの上部に、(目の不自由な人のために)識別用の切れ込みが入っていたことです。チーズも購入しました。この後に食べるのが楽しみです(笑)」

―日本の酪農は戸数減少など衰退が懸念されています。生産基盤の維持・発展にはどのような方向性が考えられますか。

「酪農家の高齢化や戸数の減少は、世界に共通した課題です。ただ、日本にはこれだけバラエティーに富んだ牛乳・乳製品があるわけですから、次世代を担う子どもたちには、自らの国の牛乳・乳製品の豊かさや生産現場に注目してもらいたいと思います。酪農は、栄養を提供できる素晴らしい産業だということを、多くの人により良く知ってもらうことで、酪農の世界に就農を希望する若者が増えれば良いと思います」